広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第63号　2016〉

読みのヴァージョンⅡ

－語りのダイナミズムへ－

竹　村　信　治

本稿は，国語科の「読むこと」の授業過程を〝パフォーマンス課題－評価〟の教育評価過程と捉え，コンピテンシー育成に向けてパフォーマンスの「質」，ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準の観点を検討する考察の第２稿である。「読むこと」におけるパフォーマンスの「質」には，〝読み〟の型（＝読み方）が深くかかわっている。ここでは，前稿でモデル化した〝読みのヴァージョン〟の第３ヴァージョンを踏まえて，テキスト生成の言語過程を捉える〝読み〟を取り上げ，これにそくした観点試案を提示した。

１．はじめに

前稿[1]では，国語科の「読むこと」の授業過程を〝パフォーマンス課題－評価〟の教育評価過程と捉え，「読むこと」を通じたコンピテンシー育成に向けてパフォーマンスの「質」，ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準[2]の観点を検討した。その際，「読むこと」におけるパフォーマンスの「質」，すなわち「子どもの思考と表現」（＝〝読み〟）の「質」には，〝読み〟の型（＝読み方）が深くかかわっていると見て，その３類型を〝読みのヴァージョン〟としてモデル化し，それらの階層性にそくした観点試案を提示した。

３類型を取りまとめ，『竹取物語』を例に具体化した図（前稿，**図５**ヴァージョンⅢＢ）を以下に再掲しておく。

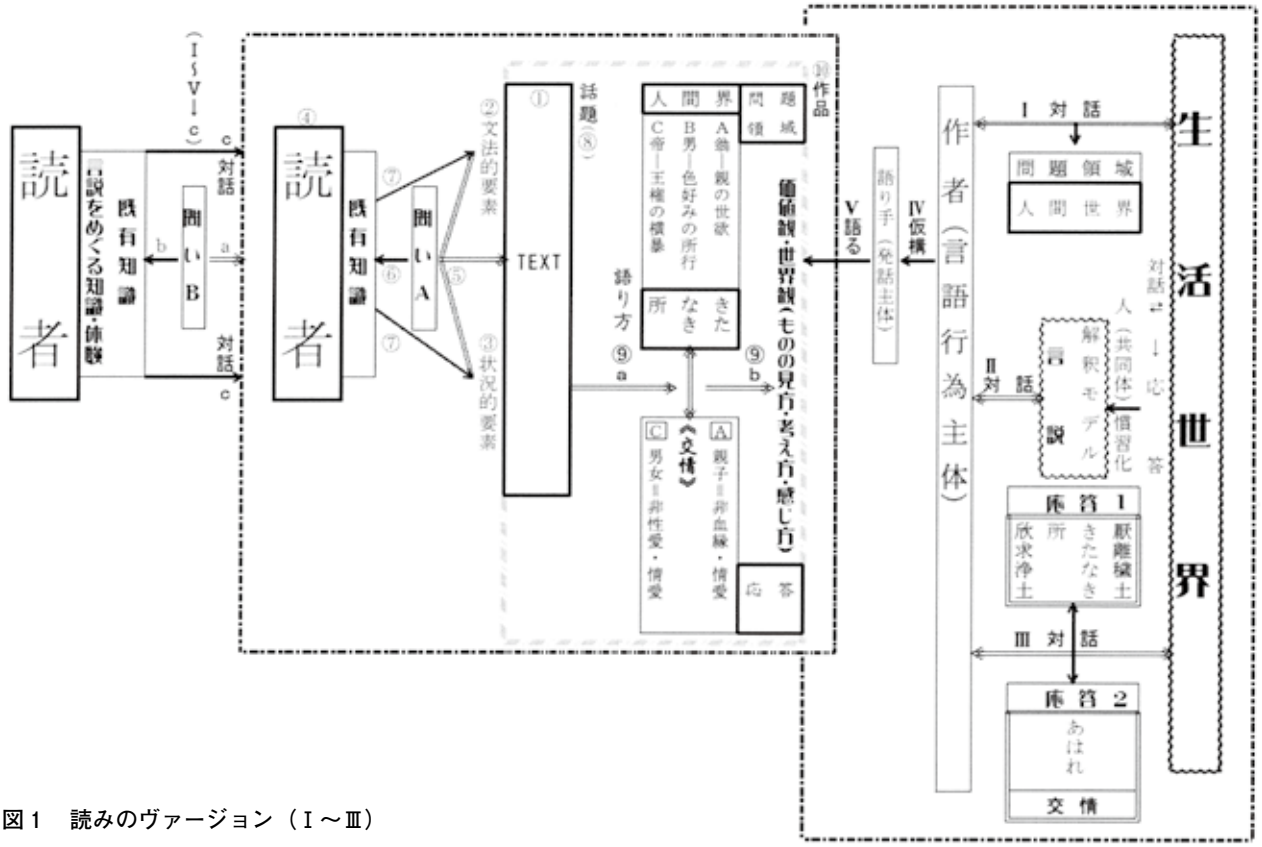

図１　読みのヴァージョン（Ⅰ～Ⅲ）

ヴァージョンⅠ（物語内容の概念的理解）は，モデル図中の①から⑧のプロセスをもってする読み方で，そのパフォーマンスは，次のごとくである。

言語体（文字列）と認知されたtext（①）に，②文法的要素，③状況的要素にかかわる課題（問いA）が読者（④）によって投げかけられ（⑤），それが読者（④）の②③をめぐる既有知識の賦活（⑥），適用（⑦）を通じて解決されるなかで，内容（⑧）が把握される。

ヴァージョンⅡ（問題領域をめぐる対話）は，ヴァージョンⅠでの⑧話題理解から⑨語り方の解釈に進み，テキスト内対話を再構成し，読者がその対話に参与して自ら応答する読み方をいう。そのパフォーマンスは，『竹取物語』を例にとれば次のごとくである。

語り方への着目（⑨ａ）から，まず，

Ａ：姫の貴顕との結婚に家名門地の夢を追う翁を介した，〝親〟なるものの世欲の諷刺

Ｂ：貴公子たちの求婚－失敗譚を通じた，〝世界の色好み〟なるものの戯画

Ｃ：帝の強引な出仕要請，実力行使の描出による，王権横暴の告発

を，さらに，物語の末段に至っての変転，

Ａ’：血縁なき姫との親子の情愛に目覚める翁

Ｃ’：性愛なき姫との情宜を深めていく帝

を読み取り，そこに〝非血縁〟〝非性愛〟をもってなお繋がる親子，男女のあり方を差し出す物語の「価値観・世界観」を認め（⑨ｂ），ここから作品（⑩）のテキスト内対話を〝親子〟なるもの，〝男女〟なるものへの問い－応答として再構成し，その問題領域をめぐって「対話」の場を開き（ａ→問いＢ），読者自らの既有知識（問題領域に関する言説をめぐる「知識・体験」）を活用しつつ（ｂ）テキストに応答する（ｃ）。

ヴァージョンⅢ（物語行為への批評）は，我々の棲まう生活世界を〝パフォーマンス課題〟と見なし，textをこれに応答したパフォーマンスと捉えて，生活世界に生起する諸事象をめぐる言語行為主体（作者）の対話＝物語行為を，自らの既有知識（世界への問い－応答をめぐる「知識・体験」）を活用しつつ批評する読み方をいう。その〝読み〟のパフォーマンスは，これも『竹取物語』を例にとれば次のごとくである。

ヴァージョンⅡの〝読み〟から，『竹取物語』の言語行為主体が捉えた世界をめぐるパフォーマンス課題を“人間世界”（親・男・王）とし（生活世界との対話Ⅰ），これへの応答については，

・流通する解釈モデル（親の情愛／色好みの雅／王土王民思想）の現実相を諷刺，戯画，告発をもって描き出し，それをもう一つの解釈モデルたる仏教の現世穢土観（「穢（きたな）き所」としての地上世界）に準拠して批評する応答１【言説との対話Ⅱ】

・物語末段における，血縁を超えた親子の交情，君民・性愛を絆としない男女の情宜，すなわち，応答１で準拠した仏教の現世穢土観が煩悩と名指す人間相互の情愛（交情＝〝あはれ〟）をこそ有限の生を生きる人たるものの絶対的価値だとする応答２【〝エクリチュールの零度〟[3]における対話Ⅲ】

を見出だし，そこに，言説に取り巻かれながら言説を越えて生の現実と向き合う物語行為を見通し，その行為の全体を評価批評する（ｃ）。

こうした〝読み〟のヴァージョンの３類型は，パフォーマンスの「質」に応じたⅠ（理解）→Ⅱ（対話）→Ⅲ（批評）の階層性をもち，認知プロセスの外化としてもこの階層性に応じた「質」の異なりをもつ。したがって，その階層性は読書行為の評価基準rubricともなりうる。また，コンピテンシーの基本定義[4]，

社会生活において，人が本来もっている知識をどれだけ実際に行動に移して活用していくことができるかの力

に照らせば，それぞれにおいて育成されるコンピテンシーにも，活用される「知識」に応じた「質」的な階層性（Ⅰ：概念的理解に関わる力）→Ⅱ（問題領域をめぐって対話する力）→Ⅲ（世界に生起する諸事象をめぐる対話に批評的に参与する力）があることは明らかであろう。

こうして，国語科における「読むこと」の授業過程を，そこでの「話す・聞く」「書く」活動も含めて〝パフォーマンス課題－評価〟の教育評価過程として描き直すとき，〝読み〟のヴァージョンの３類型は，国語科におけるコンピテンシー育成に向けたパフォーマンスの「質」，ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準の観点となしうる。

なお，あらためて言うまでもないことだが，述べ来たった〝読み〟のヴァージョンの３階層は，「読むこと」のカリキュラムでもあって，それぞれを評価規準とする学習，隣り合う階層を重層させた学習過程を通じて，〝読み〟のパフォーマンス，ひいては認知プロセス，コンピテンシーの「質」の向上が図られることになろう。

さて，前稿での議論は上のようなことだが，**図１**

のようなモデルにおいて，さらに問われなければならないのはⅣ「仮構」される語り手，Ⅴ text 上で遂行される「語る」行為についてである。前稿以来の主題に即して言えば，これらの言語過程での出来事を読む〝読み〟のヴァージョンもまた，コンピテンシー育成に向けたパフォーマンスの「質」，また，認知プロセスの「質」を問う一般評価基準の観点たりうる。

以下，『更級日記』を例に，その語りの言語過程に着目した検討を試みる。

2．『更級日記』の語り

『更級日記』は，永承７年（1052）に仏教にいう三時の最後，末法の世が始まってまもなくの康平２年（1059）の記事を末尾に語って閉じられる，菅原孝標女の人生の回想記である。教科書にも採録されてよく知られているのは，冒頭，寛仁４年（1020），作者13歳ころの次の記事，

A　あづま路の道のはてよりも，なほ奥つ方に生ひ出でたる人，いかばかりかはあやしかりけむを，いかに思ひはじめけることにか，世の中に物語といふもののあんなるを，いかで見ばやと思ひつつ，つれづれなる昼間，宵居などに，姉・継母などやうの人びとの，その物語，かの物語，光源氏のあるやうなど，ところどころ語るを聞くに，いとどゆかしさまされど，わが思ふままに，そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに，等身に薬師仏を造りて，手洗ひなどして，人まにみそかに入りつつ，「京にとく上げ給ひて，物語の多く候ふなる，あるかぎり見せ給へ」と，身をすてて額をつき，祈り申すほどに，十三になる年，上らむとて，九月三日門出して，いまたちといふ所にうつる。

年ごろ遊びなれつるところを，あらはにこぼち散らして，立ち騒ぎて，日の入りぎはの，いとすごく霧りわたりたるに，車に乗るとてうち見やりたれば，人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ち給へるを，見捨てたてまつる悲しくて，人知れずうち泣かれぬ。

また，翌治安元年（1021）14歳，上洛後に念願の『源氏物語』を手に入れて耽読するさまを描く，

B　かくのみ思ひくんじたるを，心もなぐさめむと，心ぐるしがりて，母，物語などもとめて見せ給ふに，げに自づからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て，続きの見まほしくおぼゆれど，人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにて，え見つけず。いみじく心もとなく，ゆかしくおぼゆるままに，「この源氏の物語，一の巻よりしてみな見せ給へ」と，心の内に祈る。親の，太秦に籠もり給へるにも，こと事なく，この事を申して，出でむままにこの物語見はてむと思へど，見えず。いとくちおしく，思ひ嘆かるるに，をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば，「いとうつくしう，生いなりにけり」など，あはれがり，めづらしがりて，かへるに，「何をかたてまつらむ，まめまめしき物はまさなかりなむ。ゆかしくし給ふなるものをたてまつらむ」とて，源氏の五十余巻，櫃に入りながら，在中将，とほぎみ，せり河，しらら，あさうづなどいふ物語ども，一袋とり入れて，得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。

はしるはしるわづかに見つつ，心も得ず，心もとなく思ふ源氏を，一の巻よりして，人もまじらず，几帳の内にうち臥して，引き出でつつ見る心地，后の位もなににかはせむ。昼はひぐらし，夜は目のさめたるかぎり，火をちかくともして，これを見るよりほかの事なければ，自づからなどは，そらにおぼえ浮かぶを，いみじきことに思ふに，夢にいと清げなる僧の，黄なる地の袈裟きたるが来て，「法華経五の巻をとくならへ」といふと見れど，人にもかたらず，ならはむとも思ひかけず，物語の事をのみ心にしめて，『われはこのごろわろきぞかし，さかりにならば，かたちもかぎりなくよく，髪もいみじくながくなりなむ。光の源氏の夕顔，宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ』と思ひける心，まづいとはかなく，あさまし。

の記事であろう。

これらは平安時代後期の物語受容の実際を伝え，また，今にも通う文学愛好の少女の姿をうかがわせて興味深く，教科書でもそうした教材として扱われているが，『更級日記』においては悔恨のエピソードとして語られている。そのことを端的に示しているのはＢ話題末尾の「物語の事をのみ心にしめて，～と思ひける心，まづいとはかなく，あさまし」（下線部）。それは，少女期の物語耽溺を振り返って批評する孝標女晩年の語りであって，こうした語り方は万寿３年（1026）19歳のころの回想の口吻にも認められる（下線部）。

C　かやうに，そこはかなきことを思ひつづくるを

役にて，物詣でをわづかにしても，はかばかしく，人のやうならむとも念ぜられず，このころの世の人は，十七八よりこそ，経よみ，行ひもすれ，さること思かけられず。からうじて思ひよることは，いみじくやむごとなく，かたちありさま，物がたりにある光源氏などのやうにおはせむ人を，年にひとたびにても通はしたてまつりて，浮舟の女君のやうに，山里にかくしすゑられて，花，紅葉，月，雪をながめて，いと心ぼそげにて，めでたからむ御ふみなどを，時時まち見などこそせめ，とばかり思ひつづけ，あらましごともおぼえけり。

そして，末尾の「あらましごと」をめぐる長久元，２年（1040，41）33，４歳ころの次の一節。

D　その後は何となくまぎらはしきに，物語のこともうち絶え忘られて，物まめやかなるさまに心もなりはててぞ，などて，多くの年月を，いたづらにて臥しおきしに，行ひをも物詣でをもせざりけむ。このあらましごととても，思ひしことどもは，この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は，この世におはしけりやは。薫大将の宇治に隠しすゑ給ふべきもなき世なり。『あな物ぐるほし，いかによしなかりける心也』と思ひしみはてて，まめまめしくすぐすとならば，さてもありはてず。

あるいは，康平元年（1058）51歳の次の一節。

E　昔より，よしなき物語，歌のことをのみ心にしめで，夜昼思ひて，行ひをせましかば，いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて，前のたび，「稲荷よりたまふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを，出でしままに，稲荷にまうでたらましかば，かからずやあらまし。年ごろ，「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は，人の御乳母して，内わたりにあり，帝后の御かげにかくるべきさまをのみ，夢解きも合はせしかども，そのことは，一つかなはでやみぬ。ただ，かなしげなりと見し鏡のかげのみたがはぬ，あはれに心うし。かうのみ，心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば，功徳もつくらずなどしてただよふ。

ＤＥの下線部は，ＡＢＣの話題を語る孝標女の語りの地平を明瞭に伝えるものであって，若き日の物語耽読はそうした後年の悔恨の文脈のもとで語られているのである。

ところで，こうして『更級日記』は物語耽読の日々を悔恨の対象として語るが，注意されるのはその文脈にいつも信仰，特に仏教にかかわる事象が縒り合わされていることである。

Ａに見えるのは薬師仏への物語草子落掌祈願，Ｂには仏とおぼしき僧侶による法華経第五巻持経教唆の夢託が添えられる（二重下線部）。「薬師仏」は衆生の無明煩悩の病を治すことを専らとする如来である。もって，前者は，その薬師仏に狂言綺語観[5)]が煩悩増長の種として否定する物語の取得を願う倒錯を自嘲する話題となる。『法華経』第五巻は提婆達多品の謂いであって，『法華経』読誦によって変成男子即時成仏を果たした竜女をめぐるエピソードで知られている[6)]。したがって，後者は，女人救済の功徳をもって鳴る『法華経』第五巻読習を勧めた仏を無視し（「人にもかたらず），背を向けた（「ならはむとも思ひかけず，物語の事をのみ心にしめて」）往時の自己を，これも嘲弄する話題となる。こうした仏教語彙や話題が物語耽溺悔恨の語りに加わるのは，悔恨が仏教文脈においてなされたことの証しであろう。果たして，その文脈はＣＤＥにも認められ（二重下線部），悔恨の語りが仏教的視座から発せられているのはそれらにも明らかである。

３．『更級日記』の語り手

こうして，『更級日記』作者・菅原孝標女は自らの人生を問い（生活世界との対話Ⅰ），物語耽読をめぐる問題領域に仏教的視座（解釈モデル）に立つ対話（Ⅱ）をもって応答し，その思惟を回想の語りとして著述する。その著述は孝標女その人の手になるものだが，そこで語っているのは仏教的解釈モデルを受肉した孝標女，つまりは孝標女がそうした思惟の表象行為を担うのに相応しい発話主体としてエクリチュールの場に仮構した語り手である（Ⅳ 仮構）。

この語り手の姿は，物語耽読をめぐる話題を離れても『更級日記』の其処此処に確かめられる。たとえば，寛徳２年（1045）38歳の回想。

F　いまは，昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひしりはて，親のものへぬて参りなどせでやみにしも，もどかしく思ひ出でらるれば，いまはひとへに豊かなるいきおひになりて，双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて，わが身もみくらの山に積みあまるばかりにて，のちの世までのことをも思はむ，と思ひはげみて，霜月の廿よ日，石山に参る。

また，永承元年（1046）39歳ころの回想。

G　二三年，四五年へだてたることを，次第もなく，かきつづくれば，やがてつづきたちたる修行者めきたれど，さにはあらず，年月へだたれる事也。春ごろ鞍馬にこもりたり。山ぎはかすみわたり，のどやかなるに，山の方よりわづかに野老（ところ）など掘りもてくるもをかし。出づる道は花もみな散りはてにければ，なにともなきを，十月許にまうづるに，道のほど，山のけしき，このごろは，いみじうぞまさる物なりける。

あるいは，永承２年（1047）40歳ころの回想。

H　なにごとも心にかなはぬこともなきままに，かやうにたち離れたる物詣でをしても，道のほどを，をかしとも苦しとも見るに，をのづから心もなぐさめ，さりともたのもしう，さしあたりて歎かしなどおぼゆることどもないままに，ただ，おさなき人びとを，いつしか思ふさまにしたてて見む，と思ふに，年月のすぎ行くを心もとなく，たのむ人（夫）だに，人のやうなるよろこびしてばとのみ思ひわたる心地，たのもしかし。

仏教的（宗教的）解釈モデルを体現する語り手は，40歳前後，寺社参詣に明け暮れる孝標女の日々を繰り返し語る。かかる語り手が仮構されるのは，前章冒頭にも述べた入末法の仏教言説が作用してのことであろう。天喜元年（1053）の藤原頼通による宇治平等院鳳凰堂建立供養の例を引くまでもなく，孝標女の生活空間は末法の世の仏教的救済を志向する人，そこに供せられる仏教教説が横溢する世界としてあった。孝標女がそうした場の住人であったことは，次の康平元年（1058）51歳の一節にも明らかである（波線部）。

I　さすがに命は憂きにもたえずなからふめれど，後の世も，思ふにかなはずぞあらむかし，とぞうしろめたきに，たのむこと一つぞありける。天喜三年（1055），十月十三日の夜の夢に，居たる所の屋のつまの庭に，阿弥陀仏たちたまへり。さだかには見えたまはず，霧ひとへ隔たれるやうに，透きて見え給ふを，せめて絶え間に見たてまつれば，蓮花の座の，地（つち）をあがりたる高さ三四尺，仏の御丈六尺ばかりにて，金色にひかりかがやき給ひて，御手，片つ方をばひろげたるやうに，いま片つ方には印をつくり給ひたるを，こと人の目には見つけたてまつらず，我一人見たてまつるに，さすがに，いみじく，けおそろしければ，簾のもと近くよりてもえ見たてまつらねば，仏，「さは，このたびはかへりて，のちに迎へに来む」とのたまふ声，わが耳ひとつにきこえて，人はえ聞きつけずと見るに，うちおどろきたれば，十四日也。この夢ばかりぞ，後のたのみとしける。

阿弥陀来迎の夢を見るのは阿弥陀来迎言説に捉えられたからのことであろう。孝標女はそうした時代の言説空間のなかで，仏教的解釈モデルを受肉した語り手を仮構したのである。

４．『更級日記』の語りの言語過程

ただし，この語り手は「この夢ばかりぞ，後のたのみとしける」と語るが，夢の中の孝標女が「けおそろしければ，簾のもと近くよりてもえ見たてまつらねば」（下線部）と，往生伝中の宗教者であれば随喜の涙を流すに違いない阿弥陀来迎を前にことさらに逡巡している点には，相応の注意が必要だろう。同様のことは，先に引いたＧの弁解めいた語り口にも窺える。「二三年，四五年へだてたることを，次第もなく，かきつづくれば，やがてつづきたちたる修行者めきたれど，さにはあらず，年月へだたれる事也。」そこには読者に差し出す自己像をめぐって「修行者」と見なされることへの戸惑い，躊躇いのごときものが感取される。

仏教的解釈モデルに立って物語耽読への悔恨，阿弥陀仏への帰依の語りを遂行する語り手と，往生伝的あるいは「修行者」的自己表象を回避する語り手と。『更級日記』語り手は，その言語過程において二者の間を揺れる，いわば宙吊りの語り手として現象する。

こうしたことは，仮構された語り手の揺らぎとして，孝標女その人の仏教的解釈モデルとの距離を示唆している。しかも，その距離感は，末尾，康平２年（1059）52歳の孝標女が尼と交わす贈答歌にも伝えられるものだった。

J　年月は過ぎかはりゆけど，夢のやうなりしほどを思ひ出づれば，心地もまどひ，目もかきくらすやうなれば，そのほどの事はまだ定かにもおぼえず。人びとはみな外に住みあかれて，ふるさとにひとり，いみじう心ぼそく悲しくて，ながめあかしわびて，ひさしう訪れぬ人に，

しげりゆく蓬が露にそぼちつつ人にとはれぬ音をのみぞなく

尼なる人也。

世のつねのやどの蓬を思やれそむきはてたる庭のくさむら

夫，橘俊通急逝の翌年，家族も離ればなれとなるなかで孤独を託つ孝標女。そこでは出家も思われたのであろう。文は旧知の今は尼なる人に贈られるが，尼の返歌は期待された出家の安穏自足ではなく，俗世に倍する住居の荒廃，孤独を訴えるものだった。『更級日記』はこれを末尾において回想の語りを閉じる。そこに描かれるのは，「年月は過ぎかはりゆけど，夢のやうなりしほどを思ひ出づれば，心地もまどひ，目もかきくらす」日々の果てに，一縷の希望を託した出家による宗教的救済を断念する語り手の姿であろう。仏教的解釈モデルをもって仮構された語り手は，解釈モデルが説く出家救済言説の無効性を現実に確認して退場していくのである。

さて，こうした揺らぎの中にある語り手の姿は，『更級日記』著述の言語過程が仏教的視座に立つ語り手の仮構を通じた，一義的な回想ではありえなかったことを考えさせる。仏教的解釈モデルを主体化する語り手の仮構は，いわば時代の言説空間の要請としてあるが，孝標女はそれを選択しつつも，これとの距離感の中でその回想の言語過程を多義的に遂行する（Ⅴ 語る）。永承元年（1046）39歳の次の記事は，この間の事情を確かめさせるものとして重要であろう。

K　そのかへる年の十月廿五日大嘗会の御禊とののしるに，初瀬の精進はじめて，その日，京をいづるに，（中略）ともにゆく人びとも，いといみじく物ゆかしげなるは，いとほしけれど，「もの見てなににかはせむ，かかる折にまうでむ心ざしを，さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と思ひたちて，そのあか月に京をいづるに，（中略）「あれは物詣で人なめりな。月日しもこそ世におほかれ」とわらふなかに，いかなる心ある人にか，「一時が目をこやして，なににかはせむ。いみじくおぼしたちて，仏の御徳かならず見給べき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で，かうこそ思ひたつべかりけれ」と，まめやかにいふ人，ひとりぞある。（中略）法性寺の大門にたちとまりたるに，田舎より物見にのぼるものども，水のながるるやうにぞ見ゆるや。すべて道もさりあへず，物の心知りげもなきあやしの童べまで，ひき避きてゆきすぐるを，車を，おどろきあざみたることかぎりなし。これらを見るに，げにいかにいでたちし道なり，ともおぼゆれど，ひたぶるに仏を念じたてまつりて，宇治の渡にいきつきぬ。そこにも猶しもこなたざまにわたりする者ども立ちこみたれば，舟の楫とりたるをのこども，舟をまつ人の数もしらぬに心おごりしたるけしきにて，袖をかいまくりて，顔にあてて，竿におしかかりて，とみに舟もよせず，うそぶいて見まはし，いといみじうすみたるさま也。無期にえ渡らでつくづくと見るに，紫の物語に，宇治の宮のむすめどもの事あるを，いかなる所なれば，そこにしも住ませたるならむと，ゆかしく思ひし所ぞかし。げにおかしき所哉と思ひつつ，からうじて渡りて，殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも，浮舟の女君の，かかる所にやありけむなど，まづ思ひいでらる。

天皇一代の盛事，大嘗会の当日，都へと流れる人並みを押し分けるようにして初瀬詣でに向かう孝標女は，道行く人の嘲弄に「かかる折にまうでむ心ざしを，さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と自らを励まし，「一時が目をこやして，なににかはせむ。いみじくおぼしたちて，仏の御徳かならず見給べき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で，かうこそ思ひたつべかりけれ」の声に励まされ，「ひたぶるに仏を念じたてまつりて」宇治の渡に到着する。そこで船出を待つ間に立ち上がった感懐が末尾の下線部。『源氏物語』宇治十帖の宇治八宮の大君，中君，そして浮舟の暮らしぶりを幻視するその眼差しは，現実世界を越えて物語世界に没入する孝標女の姿をよく伝える。

それは，先のＤに引いた長久元，２年（1040，41）33，４歳ころの一節，「その後は何となくまぎらはしきに，物語のこともうち絶え忘られて，物まめやかなるさまに心もなりはててぞ，などて，多くの年月を，いたづらにて臥しおきしに，行ひをも物詣でをもせざりけむ。」の物語忘失，そして，40歳前後の「修行者」めく寺社参詣の日々の最中のことだが，こうして孝標女の物語世界への回路は「ひたぶる」の仏教帰依の内側に維持されて，折々に開かれ，回想の言語過程に前景化するのである。

『更級日記』は冒頭に物語嗜好と耽読の日々を語る（Ａ・Ｂ）。それが悔恨の回想としてあることは先に確かめたとおりだが，その語りは見られるように物語への渇望，落掌の歓喜，耽読の愉悦を再現するものとしてもある。これもまた，時代の仏教的言説空間の中で，これに準拠した語り手を仮構して悔恨懺悔の回想語りを構成しつつも物語世界への回路を前景化する，『更級日記』の言語過程の動態を伝えていよう。語りのダイナミズムとはこれをいう。

5．おわりに

『更級日記』作者・菅原孝標女は自らの人生（生活世界）を問い（対話Ⅰ），物語耽読をめぐる問題領域に時代の解釈モデルたる仏教的視座に立つ対話（Ⅱ）をもって応答し，その思惟を回想の語りとして著述する。しかし，そこに開かれる問題領域は，末尾Ｊの「年月は過ぎかはりゆけど，夢のやうなりしほどを思ひ出づれば，心地もまどひ，目もかきくらすやうなれば，そのほどの事はまだ定かにもおぼえず。」や，次のような記事を視野に収めれば，広く女性の生き方に開かれていたことがわかる。

Ｌ　永承２年（1047）～天喜５年（1057）40歳～50歳
世中に，とにかくに心のみ尽くすに，宮仕へとても，もとは一筋に仕うまつりつかばやいかがあらむ，時どき立ち出でば，何なるべくもなかめり。歳はややさだ過ぎゆくに，若々しきやうなるも，つきなうおぼえならるるうちに，身の病いと重くなりて，心にまかせて物詣でなどせしことも，えせずなりたれば，わくらばの立ち出でも絶えて，長らふべき心地もせぬままに，幼き人々を，いかにもいかにも，我があらむ世に見置くこともがなと，臥し起き思ひ歎き，頼む人（夫）のよろこびのほどを心もとなく待ち歎かるるに，秋になりて待ち出でたるやうなれど，思ひしにはあらず，いとほいなく口惜し。

Ｍ　康平元年（1058）51歳
いまは，いかでこの若き人々おとなびさせむと思ふよりほかの事なきに，かへる年の四月に（夫が任国から）のぼりきて，夏秋もすぎぬ。（夫は）九月廿五日よりわづらひ出でて，十月五日に，夢のやうに見ないて（亡くなり），思ふ心地，世中に又たぐひある事ともおぼえず。初瀬に鏡たてまつりしに，ふしまろび泣きたるかげの見えけむは，これにこそはありけれ。うれしげなりけむかげは，来し方もなかりき。いま行く末は，あべいやうもなし。廿三日，はかなく雲煙になす夜，（息子仲俊を）去年の秋，いみじくしたて，かしづかれて，うちそひて下りしを見やりしを，（その夫葬送の日は）いと黒き衣の上に，ゆゆしげなるものを着て，車の供に，泣く泣く歩み出でてゆくを見いだして，思ひいづる心地，すべてたとへむ方なきままに，やがて夢路にまどひてぞ思ふに，（そんな私を）その人（亡夫）や見にけむかし。

こうした女の生をめぐる問題領域は，すでに『源氏物語』に開かれていたことで，それは夕霧帖に語られる次の紫の上の思惟に明らかである。

Ｎ　『女ばかり，身をもてなすさまも所狭う，あはれなるべきものはなし。もののあはれ，折をかしきことをも見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば，何につけてか，世に経る映えばえしさも，常なき世のつれづれをも慰むべきぞは。おほかた，ものの心を知らず，いふかひなきものにならひたらむも，生ほしたてけむ親も，いと口惜しかるべきものにはあらずや。心にのみ籠めて，無言太子とか，小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに，悪しきこと善きことを思ひ知りながら，埋もれなむも，いふかひなし。わが心ながらも，良きほどには，いかで保つべきぞ』と思しめぐらすも，今はただ女一の宮の御ためなり。

2008年の源氏千年紀の基点は寛弘５年（1008）だったが，その年に生を享けた菅原孝標女は『源氏物語』耽読の読者として，『源氏物語』が開く問題領域に即して現実を見つめ，思惟したとおぼしい。『更級日記』は，『源氏物語』の問いを引き受け，これに応答するものであった。その応答は，仏教的視座に立つ対話（Ⅱ）を枠組みとしつつも，ＬＭに見るように自らが歩んだ生の現実（生活世界）との対話（Ⅲ）が軸をなす。そしてそこに時に賦活される物語の美的世界への回路。『更級日記』生成の言語過程はそれらの錯綜のうちにある。本稿で取り上げた〝読み〟のヴァージョンとは，そうした錯綜，すなわち，語りのダイナミズムを読む読み方をいう。

世界に生起する諸事象をめぐる〝パフォーマンス課題〟をめぐって，言説に取り巻かれながら応答する対話的な営みは，物語行為ばかりでなくテキスト生成の言語過程にもある。しかもそれは，動的な揺らぎ，変転を伴って，錯綜する現実の思惟を生々しく伝え，生の現実との出会い，これへの深い理解，対話的な思索を読者に用意する。したがって，コンピテンシー育成に向けて〝読み〟のパフォーマンスの「質」，ひいては認知プロセスの「質」を問う一般評価基準の観点には，ヴァージョンⅢの〝物語行為の批評〟に次ぐ〝言語過程の批評〟が必要であり，その如何を問うことが有効であろう。

注

１）竹村「読みのヴァージョン－パフォーマンス評価の観点－」（『中等教育研究紀要』62。2016.３）

2）ルーブリックには，ある教科や領域で共通する「一般評価基準」と，それをもとに課題ごとに作っていく「課題別評価基準」があるが，本稿では前者を課題とする。松下佳代『パフォーマンス評価－子どもの思考と表現を評価する－』日本標準ブックレット№.7，日本標準，2007，p.23。

3）竹村「文学という経験－教室で」（『文学』15-5　2014.9），参照。

4）Patrick Griffin，Barry McGaw，Esther Care 原編著・三宅なほみ監訳・増川弘如，望月俊男編訳『21世紀型スキル－学びと評価の新たなかたち』2012，北大路書房，2014，p.vii。

5）仏教の教えを真実と見なし，文芸を道理に合わない言葉と飾り立てた言葉として否定する考え方。下記の白楽天「香山寺白氏洛中集記」を出処とし，日本でも『和漢朗詠集』下・仏事に「願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤（咎・過），翻為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁」と採られるなど，平安中期以降，文学観の主要をなした。

白氏洛中集者，楽天在洛所著書也。大和三年春，楽天始以太子賓客分司東都，及茲十有二年矣。其間，賦格律詩凡八百首，為十巻。今納于龍門香山寺経蔵堂。

夫以狂簡斐然之文，而帰依支提法宝蔵者，於意云何。我有本願。**願以今生世俗文字之業・狂言綺語之過，転為将来世世讃仏乗之因・転法輪之縁也**。十方諸仏三世諸仏，応知，噫，経堂未滅，記石未泯之間，乗此願力，安知我他生不復游是寺復覩斯文，得宿命通省今日事，如智大師記霊山於前会，羊叔子識金鐶於後身者歟。於戯，垂老之年，絶筆於此。有知我者，亦無隠焉。大唐開成五年十一月二日，中大夫守太子少傅，馮翊県開国侯上柱国賜紫金魚袋白居易楽天記。（『白氏長慶集』巻七一）

6）『梁塵秘抄』巻二「提婆品十首」（110～119）にも，以下のように詠われている。

娑竭羅王の女だに，生まれて八歳といひし時，一乗妙法聞き初めて，仏の道には近づきし（113）

女人五つの障り有り，無垢の浄土は疎けれど，蓮花し濁りに開くれば，竜女も仏に成りにけり（116）

凡（おほよ）す女人一度も，この品誦する声聞けば，蓮に上る中夜まで，女人永く離れなむ（117）

常の心の蓮には，三身仏性おはします，垢つき穢き身なれども，仏に成るとぞ説いたまふ（119）

※引用文献（引用に際しては表記等，改めたところがある）

・『更級日記』…新日本古典文学大系『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』，岩波書店，1989.11
・『源氏物語』…新編日本古典文学全集『源氏物語④』，小学館，1996.11
・『梁塵秘抄』…新日本古典文学大系『梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡』，岩波書店，1993.6
・『白氏長慶集　下』，藝文印書館，中華民国70年（1981）２月再版